

# がん患者さんの 生と死を見つめて

がん・感染症センター東京都立駒込病院  
院長 佐々木 常 雄

20世紀は、がん患者さん本人に対しては、がんという病名を隠し病気の悪化や死を隠しました。私たちは「あなたが死ぬなんてそんな残酷なことをどうして言えようか」と考え、病気の悪化を、死を隠すことが、最大の愛であり、思いやりであると信じました。

21世紀に入って、「患者本位の医療」という御旗の下で、患者の権利として、治療法を選択する自己決定権、セカンド・オピニオン（検証権）などが当然の時代となり、患者さん本人に本当のことを告げるのがあたりまえの時代となりました。

ここ数年の間に、がん患者さんは「もう治療法はありません」「あと3ヶ月の命とってください」と医師から直接告げられ、死と直面しなければならぬ時代となりました。そして、この死の宣告で、奈落に落とされ、涙ながらに、セカンド・オピニオンとしてたくさんの患者さんが相談に来られるようになりました。

痛みやいろいろな辛い症状を取る技術は進歩しましたが、しかし、短い命を知った患者さんは、宗教なしで、死の恐怖をどうやってのり越えるのだろうか？

死に直面した患者さんに対して「死の恐怖をのり越える術」を探し、そして「愛と思いやり」を、「仁」をどのような形で発揮出来るのかが、21世紀終末期医療で、私たちの大切な課題だと思います。